奥多摩寮調査

調査地
〒198-0222 東京都西多摩郡奥多摩町境 779
奥多摩むかし道（旧青梅街道沿い）

チーム 鐵鋼だ
20N1004 宮部 雅太
20N1014 伊藤 稜
20N1037 金丸 晃輔
20N1050 木崎 翔吾
20N1151 渡邊 晴故

00. 調査背景

木造の建築が主に建てられてきた日本において、本来廃墟とは石造の建築が発達してきた西洋の定義である。つまり日本に厳密に言えば存在しないのである。

というのも日本では古来よりスクラップ＆ビルドが基本で木造であれば、修繕が可能であるため、壊れてきたら作り直してきた。なので廃墟の定義に日本の木造建築は当てはまらないのである。しかし、日本では近年、取り壊されない、西洋的な廃墟が増えたとよく言われるのも事実で、道路の4m制限などの法律上の問題から廃墟化した建造物を指す。

そこで、私たちの班は日本における廃墟の壊れ方を実際による調査を元にスケールの大きな図面と模型製作を通して把握し、それを分類分けすることで、SDGs時代におけるこれからの都市・建築を考えていく。
この調査による壊れ方のプロセスを理解することで、逆算による良い建築の造り方の模索まで期待したい。

紙からディテールもしっかり調査することで読み取れた

01. 調査地

奥多摩寮は旧青梅街道沿いに存在し、かつては三軒茶屋や、馬の水飲み場が構える。急な崖下には多摩川が流れ、その先の小河内ダムに繋がる。

現在の様子

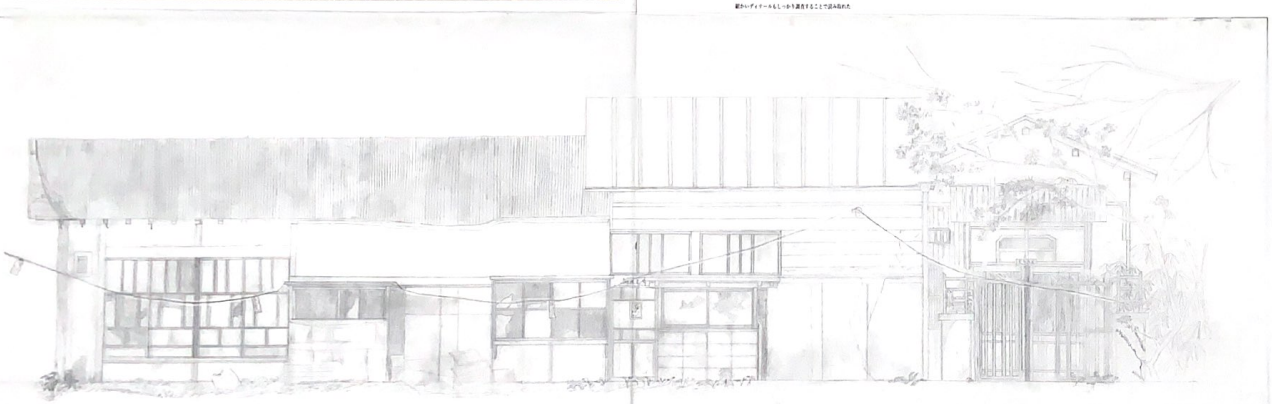
小河内ダムは東京都の水瓶として機能しているが大正時代までは小河内村が存在していた。
奥多摩寮はその作業員の宿場として栄え、1980年頃に廃墟化したと言われ、のち40年間無人の状態になっている。

小河内ダム

小河内村の様子

奥多摩寮は原形の部材が所々変わっていたり、特殊な装飾が見受けられ、建築の壊れ方を考察する上で、いろいろなマテリアルを用いていることから資料収集の豊富さから、今回の調査対象へ選定した。

また廃墟は法律によって侵入が禁止されているため、ピッ距離や高さ棒を駆使し、立面の計測を実施、立面図に重点を当てた調査である。

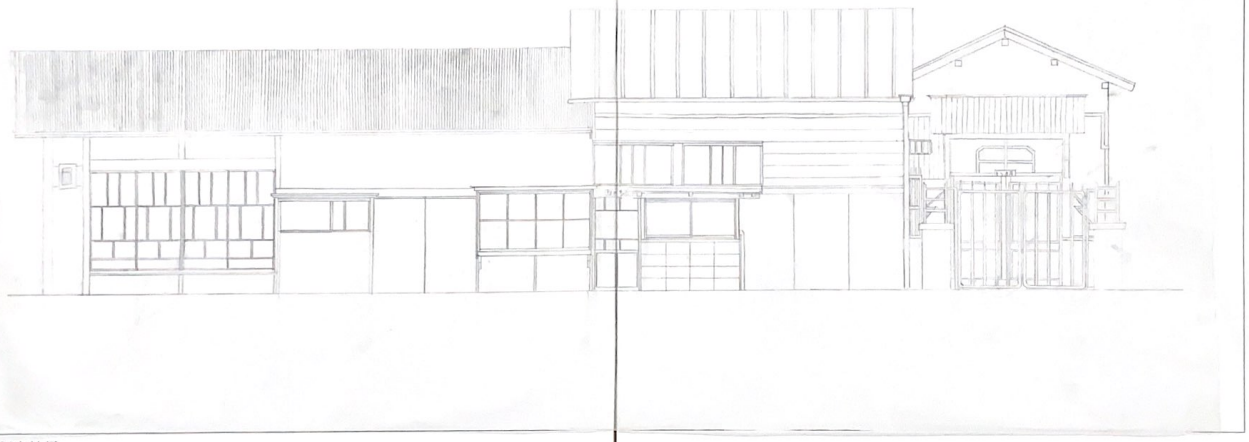


02. 調査結果

調査の結果として上記の図面や写真で示している通り、石や鉄といった無機物は時間が経過しても錆や劣化などが見受けられるものの、原形は保つことができていた。それに対して木材などの有機物は朽ちて落ちてしまい原形を保つことができていない箇所も見受けられた。日本は木材で主に構成されていくので自然界との境界を作っていた壁や屋根が朽ち落ちてしまうことによって内部などが人の世界から自然の世界へと変わっていくのである。だから廃墟にはやがて野生動物などが住み着くようになったり、植物が繁茂などから生え始めたり、自然に還ろうとする傾向があるということができるのではないだろうか。壊れ方も雨風などを最も強く受ける端の材などから壊れていき、中央そして全体が壊れていくというプロセスがあるのではないかということが今回の調査から仮説として得られた。そこでいわゆる日本の廃墟と西洋の廃墟に違いを考えた時に最も違うのが材がその地に還るか還らないかということである。日本の材は有機物主体であるからやがては地に還り、無くなる。西洋の廃墟は無機物主体であるからその地に残り続けるのである。日本の廃墟とは手が加えられないことで消えゆく有機材と残る無機材によって複雑に構成される構造体であるということができるのではないだろうか。この不安定で不思議な構造に人々は惹かれ寄り付くのである。廃墟になる理由は様々であり、もちろん犯罪の温床になり得るなど負の側面が多いかもしれないが、この消えゆく材と残る材の複雑性からは私たちのデザインや表現のヒントになり得る要素が多く隠されているのではないだろうか。目を背けずしっかりと向き合うことで見えてくるものがあるということを再認識することができたと思う。

(00). 調査背景

(01. 調査地



02. 調査結果

調査の結果として上記の図面や写真で示している通り、石や鉄といった無機物は時間が経過しても錆や劣化などが見受けられるものの、原形は保つことができていた。それに対して木材などの有機物は朽ちて落ちてしまい原形を保つことができていない箇所も見受けられた。日本は木材で主に構成されていくので自然界との境界を作っていた壁や屋根が朽ち落ちてしまうことによって内部などが人の世界から自然の世界へと変わっていくのである。だから廃墟にはやがて野生動物などが住み着くようになったり、植物が植栽などから生え始めたり、自然に還ろうとする傾向があるということができるのではないだろうか。壊れ方も雨風などを最も強く受ける端の材などから壊れていき、中央そして全体が壊れていくというプロセスがあるのではないかということが今回の調査から仮説として得られた。そこでいわゆる日本の廃墟と西洋の廃墟に違いを考えた時に最も違うのが材がその地に還るか還らないかということである。日本の材は有機物主体であるからやがては地に還り、無くなる。西洋の廃墟は無機物主体であるからその地に残り続けるのである。日本の廃墟とは手が加えられないことで消えゆく有機材と残る無機材によって複雑に構成される構造体であるということができるのではないだろうか。この不安定で不思議な構造に人々は惹かれ寄り付くのである。廃墟になる理由は様々であり、もちろん犯罪の温床になり得るなど負の側面が多いかもしれないが、この消えゆく材と残る材の複雑性からは私たちのデザインや表現のヒントになり得る要素が多く隠されているのではないだろうか。目を背けずしっかりと向き合うことで見えてくるものがあるということを再認識することができたと思う。